談話室

「昭和16年夏の敗戦」からの学び
──偉大な先人──

2025年は「戦後80年」、「昭和100年」という節目の年でした。

その節目の年ということで様々な分野で戦後80年、昭和100年を振り返る機会がありました。そのなかで私が最も注目したのは８月にNHKで放送されたドラマ「シミュレーション～昭和16年夏の敗戦～」（原案 猪瀬直樹著『昭和16年夏の敗戦』）です。

昭和16年に設置された内閣総理大臣直属の「総力戦研究所」に、軍・官・民から若き精鋭たち（人格高潔、知能優秀、身体強健ニシテ将来各方面ノ首脳者タルヘキ素質ヲ有スル者）を選抜し、模擬内閣を編成、日米開戦のシミュレーションを行うというものでした。その模擬内閣で総理大臣役を務めたのが当時の産業組合中央金庫（現・農林中央金庫）の調査課長であった窪田角一氏（本ドラマでは宇治田洋一氏）であったことが、私がこのドラマに注目した最大の理由でした。

弊社 農林中金総合研究所は1990年に農林中央金庫調査部を分社して設立ですので、いわば窪田氏は弊社社員にとっても大先輩にあたります。その大先輩の苦悩がどう描かれるのか、非常に関心があったのです。なお、『昭和16年夏の敗戦』にかかる書評は、農林金融2025年８月号の「本棚」にて弊社常務取締役の小畑が掲載しているのでそちらもご一読いただければと思います。

このドラマは「若き精鋭たちが『日本必敗』と結論を導き出すなか、どのようなメカニズムで日米開戦に至ったのか」というのがストーリーの主流ですが、私が最も印象深く感じたのはドラマ後編の冒頭で主人公である宇治田洋一氏が、「開戦絶対回避」を主張する最中で語った以下の行でした。

「私は農村の負債整理をしていましたので、国中の農村を歩きまわり、貧しい地域の惨状を見てきました。特に昭和９年の東北はひどく、飢えや身売りが後を絶ちませんでした。食うに困った人間たちが、最後に何をするか私はこの目で見ました。」

私自身、農林中央金庫でのキャリアにおいて「負債整理」に関わる場面も相応にあったこと、また東北（宮城）での勤務経験もあったため、この口上がどうしても気になり、視聴後に「昭和９（1934）年の東北」について調べてみましたところ、以下の事象が当時起こっていたことを知りました。

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/

・昭和９年の東北地方は７月には晴れた日はわずか５日、９月は12日間も雨が降り続く事態に。このため東北６県の作付面積の96%が被害を受け、収量は平年作の約６割にとどまった。コメの収穫が平年作のわずか12%という農村も出るほど。（注１）
・この大凶作は昭和恐慌と重なったため、都市部の大失業、都市住人の帰農による人口流入などにより農村経済は一層疲弊、農家家計は貧窮化し、地域によっては身売り、欠食児童、行き倒れ、凍死が激増、まさに大飢饉となった。（注２）

ということでした。こうやって記すだけでも背筋が凍る事態です。

そのような時代で「農村の負債整理」に奮闘されていた諸先輩方には本当に頭が下がるとともに東北での勤務経験があったにも関わらず、このような事態が発生したことを知らなった自分の無知を恥じました。そして豊かな食の存在が人道上においてもいかに重要であるかをあらためて認識するに至りました。

そこから90余年、2025年は「令和のコメ騒動」に翻弄された１年でした。90年前に起きた事象は「大冷害」でしたが、現代は「高温障害」に直面しています。昭和９年当時に起きた背筋が凍る事態には至っていませんが「深刻なコメ不足」に直面した点では同じです。

今後も難しい局面が続く日本の農業ではありますが、本ドラマで主人公が語った「食うに困った人間たちが、最後に何をするか・・・」といった事象は決して起こしてはならないと心底感じています。日本の農業にとって2025年度～29年度の「農業構造転換集中対策期間」は今後の命運を分けるとても重要な期間となります。弊社は中長期テーマとして「持続可能な農業の構築と食料安全保障に向けて」（環境と調和し、産業として持続可能な農業を成立・発展させ、そして日本の食料安全保障を向上させるために）を掲げているところです。偉大な先人に負けぬようしっかりとしたファクト分析を行いつつ調査研究に励んでまいります。

2026年もよろしくお願いいたします。

（注１、注２）荒川秀俊・宇佐美龍夫（1985）『日本史小百科 災害』近藤出版社等から概要抜粋

（（株）農林中金総合研究所 代表取締役社長　高　義行・たか よしゆき）

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/